

博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査） 佐々木 あや乃



学位請求者： 中村 菜穂

学位請求論文： イラン立憲革命期における詩的言語の研究

【結論】

本論文は、イラン立憲革命期(19世紀後半-1925)の詩人たちを取り上げ、その生涯と作品の特徴の分析を通し、この時代における詩人たちの問題意識を探りつつ、詩の変化要因となった政治、社会の動向とともに、ペルシア語詩の歴史におけるこの時代の詩の特徴について考察をおこなった意欲的な研究である。芸術としての革新性においては不十分と見做されてきた立憲革命詩への評価に対し、こうした従来 of 詩人や批評家の思考自体に疑問を投げかけた点は画期的であり、「ある一時代の文学が後世十分に理解し得ないものとなった背景には、文学をめぐるパラダイムの転換が起こっていた」との考えに基づき、立憲革命という文学的パラダイムの終焉について考察を加えつつ、政治・社会状況の変化と一連の詩人個々の経験および文学をめぐる議論を通して、一時代と文学の変容を丹念に、かつ極力具体的に解き明かした手法は高く評価できる。藤井守男（本学名誉教授）、柴田勝二、丹羽京子、水野善文と佐々木あや乃から成る審査委員会は、中村菜穂氏から提出された博士学位請求論文「イラン立憲革命期における詩的言語の研究」の審査および口述による学力の確認（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい業績であるとの結論に達した。

【請求論文の概要】

本研究は、イランにおいて1905年末から1911年にかけての立憲革命に結実した、立憲革命を支持した詩人たちによって詠われた政治・社会批判詩「立憲革命詩」を詠った5人の代表的詩人の生涯と作品の特徴の分析をおこない、この時代における詩人たちの問題意識を探り、詩の変化要因となった政治・社会の動向とともに、ペルシア語詩の歴史におけるこの時代の詩の特徴について明らかにした研究である。

本研究は全8章にわたる力作である。序章において歴史的背景と先行研究、問題設定について述べられた後、第1章から第5章まで、5人の詩人を生年順に取り上げ、生涯、詩的特徴、詩の分析の順、に記述がなされている。第6章は、この時代

の詩の革新をめぐる文学論争が取り上げられ、第7章では、立憲革命詩の詩的言語の特徴について、復古分銅との関わり、ヨーロッパ文学の受容、同時代における模倣という三段階において考察がなされ、終章においてすべての議論が総括されている。

「立憲革命詩のトポス」と題された序章では、西暦9世紀に遡る近世ペルシア語による詩の伝統が、近代主義的な観点から批判的に捉えなおされ、それ自身として変化を遂げつつ政治や社会に対して能動的に働きかけようとした「立憲革命詩」なるものが、ペルシア文学史において特異な位置を占めることに言及し、立憲革命文学に彩られた時代の政治・社会をめぐる歴史的過程を踏まえたうえで、立憲革命詩の質的な価値（文学としての主題や言語的特徴）を論じるという本研究の目的が明示されている。次いで、ヨーロッパ人の視点からの立憲革命詩の文学的評価や再評価及びイラン国内の批評や研究といった先行研究を踏まえた後、本研究における新たな3つの視点、すなわち詩的言語の政治的・社会的側面、詩的経験、そして文学史的論点という問題設定をおこない、本研究で研究対象とする5人の詩人の選定理由についても明白に言及されている。

第1章では、「立憲革命詩の中心人物」セイエド・アシュラフッディーン（1870-1934、以下アシュラフ）が取り上げられている。幼くして父を失い、イラクのシーア派聖地でしばらく過ごした後イランへ戻り、北部ギーラーン州の町ラシュトを拠点に新聞『北のそよ風』を発行した。立憲制を擁護し、教育の必要性を訴えたアシュラフの韻文による創作は、平易な日常語を用い、庶民の幅広い人気を得た。彼の詩に現れた民衆の口承文化の要素や庶民の生活への視点は、同時代の詩人たちにも大きな影響を与えた。

第2章では、立憲革命期の詩人であるシンガー・ソングライターとして知られるミールザー・アボルガーセム・アーレフ・ガズヴィーニー（1879頃-1934、以下アーレフ）が扱われている。ガズヴィーニーの礼拝の導師の息子として生まれた彼は、生来美声の持ち主で、若い頃に音楽と書道を学んだ。アーレフは、立憲革命に関わる主題を抒情詩（ガザル）やタスニーフと呼ばれる歌謡において作詩し、自ら作曲、演奏して歌った。また彼自身、自らの歌によって「祖国愛」を人々に知らしめたことを誇りとした。詩的言語の点では、歌謡の分野はそれほど厳格な言葉遣いが求められないため、アーレフの表現はより柔軟であった。また一方で、感情そのものを詠う「心の人」という彼の人物像は、伝統的な抒情詩の言語から少なからず影響を受けたものと考えられる。

第3章では、立憲革命期からパフラヴィー朝（1925-1979）期にかけて活躍した詩人、政治家のモハンマド・タギー・バハール（1886-1951、以下バハール）が扱われ

ている。イラン北東部マシュハドのイマーム・レザー廟の桂冠詩人の父同様、彼自身も若くして桂冠詩人となったが、立憲革命に際して政治活動に加わり、デモクラート党機関紙『ノウバハール』を発行し、立憲制を擁護する詩を詠んだ。親族や地元の学者たちの許で学んだ彼は古典定型詩とりわけカスィーダ（頌詩）に優れ、ペルシア語の定型詩における最後の古典詩人と見做されている。彼は古典詩に依拠しつつ、近代的な価値観を持つ詩人であった。文芸雑誌『知の館』では、ヨーロッパ文学の紹介に力を注ぐと同時に自らの詩論を展開した。

第4章では、イランで共産主義詩人として知られるアボルガーセム・ラーフーティー（1887-1957、以下ラーフーティー）が取り上げられている。イラン西部ケルマーンシャーで神秘主義詩人の父の許に生まれ、若い頃は彼も神秘主義詩を作ったが、当時のさまざまな思想傾向のなかでフリーメーソンに参加、その後協賛主義へと変遷を遂げた。立憲革命に際して彼の詠った詩は目新しく、写実的な描写を行っていた点で注目される。地方警備隊に所属し、軍人でもあったラーフーティーは、1922年にレザー・ハーンの軍司改革に反対して蜂起するが失敗、ロシアに逃亡する。さらにその後、タジキスタンで文学者として活躍する。中村氏は主に1922年以前の詩に注目し、一人の急進的なナショナリストとしての詩人ラーフーティーにおける詩的表現の意識的な使い分け（革新的かつ写実的な表現と伝統的な抒情詩の言語との使い分け）について考察がなされている。

第5章では、立憲革命期最終段階に位置する詩人ミールザーデ・エシュギー（1894-1924、以下エシュギー）が扱われている。イラン西部ハマダーン出身で、地元のフランス系のアリアンス学校と私設学校に通った彼は、ヨーロッパ文学からも影響を受けていた。第一次世界大戦にアーレフやラーフーティーと知り合い、1919年のイラン・イギリス協定後、容赦のない風刺詩人として知られた。1921年クーデター後、風刺雑誌『20世紀』を創刊、オペラの形式に関心を抱き『イラン諸王の復活』等の韻文劇を創作、自ら演じもした。イランで後に顕著になるロマン主義的傾向を示した詩人であるエシュギーは、政治活動においては過激な論考や詩を書き、1924年の反共和制運動に際して体制批判が元となって銃で暗殺された。また、後に自由韻律詩の創始者となるニーマー・ユージーの、当時としては画期的で「完全に芸術的な」内容を持った長編詩「アフサーネ」を、最初に理解した人物でもあった。

第6章は「詩の革新をめぐる議論」と題され、イラン文学史上に知られる詩の論争が取り上げられる。北西部の都市タブリーズはとりわけ政治運動の盛んな地域であった。論争は、第一次世界大戦末期に同地で発行されたアゼルバイジャン・デモクラート党の機関紙『革新』と、首都テヘランの文学結社「知の館」に集った人々

の間に起こった。『革新』の執筆者である詩人タギー・ラフアト（1889-1920）は「文学の革命」を掲げ、古典文学からの断固たる訣別を訴えるとともに、古典詩の模倣に終始している首都の文学者たちを批判した。文学サークル「ダーネシュキャデ（知の館）」の中心人物であり、同名の文学雑誌を主宰したバハールはラフアトに応答し、文学の革新に同意しつつも古典文学に依拠することを訴える。両者の主張は折り合わず平行線を辿るが、ここで提起された問題は、後の詩の革新にとって重要な契機となったことが指摘されている。

「模倣と再創造」と題された第7章では、立憲革命期の詩人たちに共有される詩的言語の特徴について、古典詩の模倣、ヨーロッパ文学の受容、同時代における模倣という3つの側面から論じる。作品の独創性を重視する近代的な文学観は、この時代にヨーロッパから導入されたが、既存の詩を模倣することは広くおこなわれており、それ自身の重要性が認められる。第一に、1世紀以上にわたって続いた復古運動の影響は立憲革命期にも見られ、詩的言語の簡素化をもたらしたほか、古典詩を引用することには人々の共通の知識に訴える点でも利点があった。第二に、ヨーロッパ文学からは詩や散文の影響が見られるが、その取り入れ方には翻案や模倣等いくつかの段階があった。ラ・フォンテーヌの韻文訳のように、教育的視点が重視されたのも特徴の一つである。第三に、詩人たちの間でも形式の借用や共通する語句がしばしば用いられた。このことは「立憲革命」に係わる主題の個々人における展開としてもみることができる。

「炎の詩から光の詩へ——立憲革命パラダイムの終焉」と題された終章は、前章までの内容を総括し、「立憲革命」を中心的な主題とする詩の一時代が終焉していった過程を、詩人たちの生きた時代の政治・社会状況と、文学の革新に関する議論の変遷の両面から整理する。最終的に、立憲革命という文学的パラダイムは、その両面において継続が不可能となったものの、この時代に試みられた文学の可能性の豊かさは、今日再評価に値するものであると結論づけている。

【論文の評価】

本論文の評価すべき点は以下の通りである。

1. 宮廷文学として圧倒的な存在感をもった古典定型詩と、19世紀末葉から20世紀初頭の政治運動に連動して登場する立憲革命詩の内容上の根本的な相違を、「現実の政治・社会への批判的視座、民衆への働きかけや訴え」に見出し、このテーマを軸に割り出される5人の立憲革命期の詩人とその詩作品を、特に、西洋文学の翻訳との関連性、古典期のペルシア詩の模倣の質と相互の相関性、およびこれらの詩人との影響関係、という三つの視点から、優れて実証的に分析している点。

2. アーリヤンプルによる優れた先行研究を十二分に踏まえている一方、論理の骨格、個々の分析にみる申請者の優れた洞察力・思考力が窺われ、ペルシア詩に関する本格的な詩論の展開が見られ、随所にペルシア語の詩的表現に関する卓見が散りばめられた貴重な論考に仕上がっている点。

3. 選定した5人の詩人それぞれについて、その生涯と詩的特徴を挙げた後、複数篇の詩を丁寧に分析し、翻訳のみならず意欲的に解釈も試みていることより、申請者のペルシア詩に関する高度な知識と深い理解力が窺われる点。とりわけ、ラーフーティの「蠟燭と蛾」の分析では、複数の審査委員を感動させるほどの説得力があった。

他方、指摘を受けた点は以下の通りである。

1. ペルシア古典文学における「伝統」を知らない読者にとっては、「伝統的」なるものの内実が曖昧なままである印象を拭えない。本論文の出版に向けては、ペルシア古典詩の総体的な特徴を明瞭にしたほうがよいと考えられる。

2. 宮廷文学内の詩人伝編纂に比重のある古典回帰運動の性格と、近代的意識の覚醒に根差した立憲革命詩との相関性の問題や、立憲革命文学の政治的性格とロマン派的詩の表出の経路の関係などが、今後さらに緻密に究明されることが望まれる。

3. 定型詩の韻律分析や翻字の記載等に軽微な誤りが見られる。

【審査の経緯】

2019年9月25日に論文博士の学位授与に係る予備審査の申請がなされた。予備審査の結果、学位授与の申請が許可されたのを受けて、12月2日に学位論文が提出され、12月4日の研究科教授会において学位論文審査委員会の設置が承認され、2020年2月3日に口述試験を実施することが決定した。

公開審査では、最初に中村氏が約25分間、配付資料とPowerPointに基づき論文の概要について説明をおこなったのち、各委員から論文についての評価点および問題点の指摘があり、約80分に及ぶ質疑応答がおこなわれた。中村氏は、質疑応答においては一貫して真摯に対応し、同氏の学問的誠実さ、ペルシア語の詩的表現に関する卓見、ペルシア語理解力の高さを知ることができた。委員からの質疑に対しては的確な応答が見られ、委員が指摘する論文の問題点についてもしっかりと認識しており、出版を踏まえ今後の改善にむけての意欲も窺われた。中村氏の論文は、従来のペルシア文学研究において、宮廷文学として千年以上に亘って持続した伝統的古典定型詩と、同時代の現代詩の狭間に展開した「政治的文学」として相対的な評価しか下されなかった20世紀初頭の立憲革命期の一連の詩人とその詩作品を、一つの独立した文学の運動体として評価した画期的研究であり、明確な方法意識に基づ

いたアプローチによる優れた分析を通じて、立憲革命文学の詩的言語の本質に迫った力作であるという評価については、審査委員の一致した見解であった。ペルシア文学に関する幅広い知見を土台とするペルシア詩の解釈は、中村氏のペルシア詩に関する高度な知識と深い理解力をうかがわせるものであり、学術的価値の極めて高い業績であることは明らかであった。よって、審査委員会は全員一致で中村菜穂氏に博士（学術）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。